

調査日 群馬県森林組合林産販売会議 11 月 15 日

この日県庁の 2 階会議室に、群馬県の森林組合系統の林産担当者が一堂に会した。会議と言ってもほとんどの時間は県の高山林振課長と県森連による資料の説明に費やされたが、県と県森連の構想は分かった。

私が現役だった頃、全森連を介して海沿いの大型工場と取引のある県森連へ商談に行っていたことを思い出す。合板に国産材が使われ始めた頃で宮城県のセイホク・石川県の林ベニヤ・福井県のファーストウッドなど主に外材を使っていた大型工場は、皆 港かそれに近い所にあった。

それに対して、栃木県のトーセン製材が首都圏に木材を供給するための関東平野を取り囲むような供給ベルト地帯を形成すべく群馬県に呼びかけている頃でもあった。

いわば木材の流通ルートを全国レベルで構築しようとしていた黎明期であったと思う。

それが今回の会議ではより具体的に形になって、すでにシステムが稼働し始めている。やはり渋川の工場の存在は大きく、当初の製材工場から、県外へ繋がるターミナルとしても機能している。このシステムのために各組合に増産を促すような会議であったと思うが、むしろ積極的に利用すべきではないかと思う。

組合の中には、会議の意味を理解できていない所もある様に見えたが今の林業において、資源は十分ある・増産した時の受け皿も確保しつつある国内の木材需要も国産材が中心になってきている、と言う好機にあってこのシステムをどれだけ利用できるかが、組合の浮沈を決めるだろう。

調査日 群馬県森林組合連合会共販所 11 月 16 日

この日は素生協の市と重なったので、買い方は札を入れるとすぐに素生協へ向かった。県森連は入札の締切が 13:00 時に対して素生協は 14:00 締切なので、用意された弁当を食べながら、入札するとすぐに出て行き、誰もいない。

そんな事で、入札結果発表は行われなかった。共販所の職員たちも、大型トレーラーの積込やら、次回に迫った恒例の”群馬県優良素材展示会”の準備に追われている。

入札結果のコピーをもらって帰る。

調査日 素材生産協同組合 11月28日

素生協の市は、入荷が多く見えたが実際は落札材の搬出が滞って極積する場所が無くなっている様だ。

参加者数はいつもより多く、明細書を増刷する程だった。顔ぶれも久々に名前を聞くような会社が多かった。これは虫害のリスクがある時期は仕入れをせずに、伐旬になったら仕入れをする小口の工場が買い始めたからの様で、入札結果を見ても停滞感を強く感じる。

今は再び欧米からの材がドンドン入って来ていて、全国的に原木が、だぶつき傾向の様だ。アメリカの”住宅バブル”も”ウッドショック”もコロナのあだ花であつたらしい。日本に木材を輸出している欧米諸国も自国内で木材が余っている様だ。もともと欧米は住宅は売りに出ている物件を買う物であつて、新築する例は少ない。

特に欧州では石造りの文化財の様な建物が多く、新築を規制している国もあるそうだ。都市部ではアパート暮らしが当たり前のことで、引越しや国境を越える移住も、行った先で空き物件の家を購入する。住居の移動は日本人とは違った感覚で気軽に行い、あまり土地や住居にはこだわりが無いらしい。

そんな中で、アメリカで起こった”住宅バブル”はコロナ禍で都市を離れて、郊外に家を建てて、リモートワークをする人たちが増え、この需要に当て込んで投資目的での新築住宅が増えたいらしい。アメリカ西海岸の不動産業者は砂漠の中に新しく街を作って分譲する。もともと注文住宅と言う概念が、ほとんど無いので家を建てて売らないと不動産業は成り立たない。

そこで”住宅バブル”が発生し、大量に木材を必要とする事態になって”ウッドショック”になった様だから、バブルがはじけたら大量の住宅が宙に浮く形となる。

今、木材の流通が停滞してしまっている日本だが、世界的に見ると日本は良い方だそうだ。こうして世界中で行き場を失った木材が僅かのチャンスを求めて日本へ押し寄せてきているらしい。